

中世日本における瀟湘八景詩歌の表象について

—「遠浦帰帆」を中心に—

蘇 文 甯*

一、はじめに

瀟湘八景は室町時代の日本において広く知られている中国の画題であり、詩題でもある。和歌において歌題としても扱われた。

中国の瀟湘八景について、八景の趣旨は「望帰」（帰るのを望む）という叙情的な心境の表現だと指摘されている¹。衣若芬氏によると、八景の趣旨を「望帰」として捉えるのは「遠浦帰帆」の解釈が決定的であり、帰帆によって「客旅之愁」（旅人の愁）の「望帰」の心境が読み取れたとのことである²。一方、石守謙氏は絵画の検討で宗教的に八景の趣旨を捉え、「望帰」を「帰真」「回帰」「帰家」といった修行者の志が表されていると述べた³。

「帰帆」との具体的な表象が直接的に「望帰」の情緒と結び付き、八景全体の趣旨である「望帰」を伝えた。そこで、「遠浦帰帆」一景の描き方によって瀟湘八景の取り扱い方を全体的に把握できるのではないかと考える。

しかしながら、日本の瀟湘八景をめぐる研究の中に「遠浦帰帆」に対する深い考察は比較的に少ない。中世日本の漢詩における「遠浦帰帆」について、朝倉尚氏は五山禅僧の詠じた「遠浦帰帆」に「遠浦への帰帆」と「遠浦の帰帆」と二つ捉え方があると指摘し⁴、帰帆と共に孤客や帰客が常に描かれ、断腸の心や帰愁の心が表されたという⁵。

一方、堀川貴司氏は旅の船として詠じた漢詩も

あるが、漁師の船を詠むのが多いと示し⁶、また江戸前期に成立した絵入り版本の『八景詩諺解』の「遠浦帰帆」の挿絵に漁師と漁舟が描かれていることを指摘している⁷。

よって、本稿は中世日本の「遠浦帰帆」の表象を中心に掘り下げて、漢詩と和歌に描かれた「遠浦帰帆」を検討したい。

二、中世日本における「遠浦帰帆」

（一）漢詩における「遠浦帰帆」

「遠浦への帰帆」と「遠浦の帰帆」の二つの異なる捉え方について日本に伝来した中国瀟湘八景詩を手がかりとして考察しようと思う。

中世日本で広く流布した中国瀟湘八景詩の中、覚範恵洪（北宋1071-1128、別名：洪覚範、寂音）と玉澗（南宋、生没年不詳⁸）の作品が最も知られている。特に恵洪の八景詩が五山八景漢詩の模範とされ⁹、五山禅僧に高く評価された¹⁰。恵洪の八景詩は二種類ある。まず七言古詩を掲げる。

遠浦帰帆 恵洪

東風忽作羊角転 坐看波面織羅卷
日脚明辺白島横 江勢吞空客帆遠
倚欄心緒風絲乱 蒼茫初見疑鳧雁
漸覚危檣隱映来 此時増損憑詩眼¹¹

（下線は筆者による。以下同）

第二聯における「江勢吞空客帆遠」によって帰帆が客船だと判明し、第四聯の「漸覚危檣隱映来」によって客船が遠くから帰ってくる方向性が読み取れる。そこで、この一首は「遠浦の帰帆」を描

*台湾大学・院生

いたのである。第三聯では船に乗る旅人の心を感じ、心の緒が風に吹かれたように乱れていると、孤独な旅人の憂の心を垣間見ることができる。

遠浦帰帆 恵洪

水国煙光映夕暉 誰家彷彿片帆歸

翩翩鳴鷺西風急 凝盼滄洲眼力微¹²

七言絶句の場合、第二句「誰家彷彿片帆歸」によって、船が家に向かっていくとの方向性が読み取れる。第四句の「滄洲」は昔仙人や隠者が住んでいた場所¹³であり、滄洲を眺めようが眼力が及ばないことは、遠すぎて見えない意味もある一方、昔の隠者の足元にも及ばない意味もあるのではないか。この詩に描かれたのは客船なのか漁舟なのかは判断できないが、第二句の家に向かう船と第四句の滄洲を眺める詩人を「家=滄洲」、「船=詩人」として捉えれば、この一首が「遠浦への帰帆」であることが見えるようになる。

したがって、「遠浦への帰帆」と「遠浦の帰帆」二種類の詩意及び孤独客や帰客に対する描写は恵洪の詩に由来したのであると言えるのではないか。

ところが、堀川氏の指摘したように五山禅僧の間に「遠浦帰帆」を漁舟として描く作品もある。漁舟については玉澗の詩から考えてみたい。

遠浦帰帆 玉澗

無辺刹境入毫端 帆落秋江隱暮嵐

残照未収漁火動 老翁閑自説江南¹⁴

第二句で帰帆が描かれた。それは夕嵐に隠れ、微かに見える「遠浦の帰帆」である。方向も船の種類も知る手がかりはないが、次の第三句での「漁火」によって近くの漁舟の存在が分かる。また、第四句の「老翁」について五山抄物『瀟湘八景鈔』では以下のように記された。

又ハ老翁ハ、年ヨリタル漁人ヲ、老翁ト云タカゾ。其ナレバ、此漁翁ガ、火ヲ拳テ帰ラントスルカ (後略)¹⁵

「老翁」が年寄りの漁師として解釈され、近景の船が漁舟であることが疑いはないであろう。すなわち、玉澗の描いた「遠浦帰帆」には二艘の船

が存在し、一つは遠浦の帰帆、もう一つは近くの漁舟なのである。

この漁舟の捉え方は、日本で広く知られた伝玉澗詩¹⁶に継承された。

遠浦帰帆 伝玉澗

鷺界青山一株秋 潮平銀浪接天流

歸檣漸入芦花去 家在夕陽江上頭¹⁷

末句で詠じた「家」について以下の抄物から見れば、従来船主の漁師の家であるように捉えられていた。

ア. 第四句、夕陽^ハ夕日^ノ景色^{ナリ}、此船主^ノ家^ハ。在西山江ノ上^ニ也¹⁸

イ. 彼船^ノ乗主^ノ家^ハ夕日^ノ指シタル江^ノホトリニアルヘキト也¹⁹

ウ. 家——トハ、スナトリスル家ヲ云ナリ。²⁰

そして、第三句の「漸入芦花去」によって帰っていく方向が読み取れ、伝玉澗詩の描いたのは「遠浦への帰帆」であると確認できる。伝玉澗詩に対する解釈から漁舟としての「遠浦帰帆」が中世時代に広く受け入れられ、一般的な描き方として定着したことが確認できる。

それゆえ、五山の「遠浦帰帆」の漢詩には「遠浦の帰帆」と「遠浦への帰帆」のみならず、客船と漁舟といった要素が見える。漁舟として捉えた作品について、例えば、「満載順風人到岸 大家洗脚上船歸」(大休正念)²¹や「半席風輕蟹子舟 一江浪急魚兒浦」(雪村友梅)などが見える。そのほかに、「釣尽煙波免未休」(秋澗道泉)、「落日明辺罷釣歸」(惟明瑞智)、「漁童相待倚柴扉」(竺雲等連)などがある。

また、漁舟は殆ど「遠浦の帰帆」とし、帰ってくる方向性として描かれることが見える。しかも、「満載順風」や「半席風輕」との描写から、玉澗詩で江南の良さを語る翁と似ているような気楽さを感じ取れるのである。

一方、客船として描いた作品も散見される。

万里湘江水拍天 雲帆杳々夕陽前

聖恩今及南荒遠 風穩洞庭歸客船
 (遠浦歸帆 瑞岩龍惺)
 天際春連何処山 歸帆浦遠却如閑
 風浦十幅弓穹影 万里東吳一餉間
 (遠浦歸帆 天隱龍沢)

客船が常に「遠浦への歸帆」として描かれる一方、天隱詩は杜甫の「門泊東吳万里船」を踏まえていることも明らかであり、船が走っている様子、帰途の長さとして帰っていく方向性が表される。

(二) 和歌における「遠浦歸帆」

さて、五山漢詩においては客船と漁舟の両方あるが、調べた限り、八景和歌における「遠浦歸帆」の殆どが漁舟であった。冷泉為相と為尹の歌では帰っていく方向として歌われた。

- 風むかふ雲のうきなみたつとみてつりせぬ
 さきにかへるふな人 (冷泉為相)²²
- あさなきにいそまてあまやかへるらん奥の
 かたほのさきたちにいけり (冷泉為尹)²³

五山の抄物において為相の歌は常に伝玉澗詩の注釈の最後に記されている²⁴。両者を対照してみれば、「うきなみ」が「銀浪」に対応し、「雲のうきなみたつ」の「雲」によって「接天流」が表現されている。そして「さきにかへるふな人」と「歸檣漸入芦花去 家在夕陽江上頭」との対応も明らかに見える。一方、為尹の歌と玉澗詩の対応も見える。上句では近景に朝風で帰る海人の船を描き、下句では「奥のかたほ」により遠景の歸帆が描かれている。為尹の歌は玉澗詩と同じような情景で、近景に漁舟、遠景に遠浦の歸帆を配置している。

なお、為尹は將軍足利義持の命を受けて八景和歌を詠んだと言われており、その時に同じ契機で歌を詠んだ²⁵ほかの三人の歌を見てみると、

- 暮ぬるかまほにかたほをひきませてをのか
 うら／＼かへる舟人 (飛鳥井雅縁)²⁶
- 秋かせのこ糸をほにあけてかへるなりまつ
 のえとをき奥津舟人 (花山院長親)²⁷
- 一葉かとまかひもはてすうら風のさそひて

かへる奥の釣舟 (後小松院)²⁸

近景と遠景との分け方は為尹歌と共通している。風が吹き、帆を上げて浦へ帰る漁舟の情景が共有されており、特に雅縁の歌は真帆に片帆が入り混じっている様子が捉えられ、複数の歸帆があり、為尹歌と似ている。が、為尹は朝の時間、雅縁は黄昏の時間、花山院は秋風、後小松院は浦風を捉え、それぞれの歌に描いた風景が少しずつ異なっており、歌人自ずから想像を生かして作った観念的な叙景歌なのだと見える。

それ以外の「遠浦歸帆」歌は、殆ど遠浦から帰ってくる漁舟として歌われたものである。

- いさり舟又ほのかにも見え来るは風にむかひの漕ぎ帰りけり (京極為兼)²⁹
- あま人のやとはそことも波のうへにいそくかたほのささかみえつゝ (頓阿)³⁰
- おきつかせたつに飛鳥の歸るをみれば舟にいさり火 (正徹・草根集・9254)
- あまのすむ里ははるかかの波ちとして思ふかたほにかへる舟人 (飛鳥井雅世)³¹
- しくるらしくものかたほをかけすてゝいそく小舟のあとの塩かぜ (心敬)³²
- まほならで世はうき物と浪の上にやすらひかへる興つ舟人 (正広・松下集・832)
- はるかにも漕ぎかへるかな蟹小舟猶この岸を思ふかたとて (三条西実隆・再昌草)³³
- ゆくゆくも猶夕なぎやあかざりし帰りもやらぬあまの釣ぶね (三条西実隆・雪玉集・6345)

「舟人」、「釣り船」、「あま」、「漁り火」、「漁り船」など漁舟のモチーフが共有されており、和歌における「遠浦歸帆」は仕事を終えた漁舟が帰ってくる風景として定着したことが明らかである。正徹には上記の『草根集』に収録された歌の他にもう一首の「遠浦歸帆」歌「釣ぎをのいとうちなびけおきつ風なぎたる浦にかへる舟人」(正徹千首・941)が存在し、同じ釣りから帰る漁舟として描かれたのである。

すなわち、漢詩の「遠浦帰帆」に描かれる客船は和歌には見えない。なぜ客船の「遠浦帰帆」が和歌に受け入れられなかったのかを考えるには、中世以前の帰る船を歌った和歌をまず知らなければならぬ。

『古今和歌六帖』において帰る船を詠じた歌には客船を描くことは少なかった。

- 風をいたみおきつしらなみたかからしあまのつり舟こぎ帰るみゆ (古今六帖・1813)
- さしてゆくかたはみなとのなみたかみうらみて帰るあまのつり舟 (古今六帖・1824)

1824番歌は漁舟の帰りを詠むと見える恋の歌であるが、純粋な叙景歌としてみれば、海人の釣り舟が帰る光景となる。

以上のように「遠浦帰帆」は一つの漢詩から継承した歌題であるけれども、和歌に取り入れられた時に客船が除かれ、和歌で馴染みのある帰る海人の釣り舟として描かれるようになったのである。言うまでもなく、漢詩における旅人の孤独さや旅愁なども和歌には表れていなかったのである。

(三)「遠浦帰帆」歌での「帰る釣り舟」

それでは和歌の「遠浦帰帆」には如何なる思いが表れているのかを考えてみたい。

遠浦帰帆

無辺刹境入_ル毫端_ニ、帆落_テ秋江_{カケル}隱_ニ暮嵐_ニ
此^ハコノ遠浦^ニカキリモノキガ、筆^ノハシ^ニ入
タソ。サテ此遠浦^ニハ、帆^{カケ}船^カ、イカホトモ
アリシガ、夕嵐ノ時分^ハ、見^ヘヌソ。明石^ノ浦
ノ島カクレ行、舟^ノ気色ソ。

(五山抄物『八景詩』)³⁴

下線部で示したように、玉潤詩で描いた「帆落秋江隱暮嵐」との情景が島がくれゆく舟によく似ていると思われている。島がくれゆく舟というのは以下の歌である。

- ほのぼのとあかしのうらのあさぎりにしまがくれ行く舟をしぞ思ふ (古今六帖・1818)

この歌は『古今集』にも収録された羈旅歌であり、朧かな朝霧の中だんだん見えなくなって遠ざかっていく船を描くことによってしみじみとした旅の心が語られている³⁵。

似ている情緒は為尹の歌の「さきたちにけり」に見え、また雅世の「あまのすむ里ははるかの波ちとて思ふ」や実隆の「はるかにも漕かへるかな」からも早く到着しようとする心が読み取れる。釣り舟として描かれることの多かった「遠浦帰帆」歌は明石の浦の歌のように旅の心を語るとは言えないが、遠ざかる船を眺める歌人の視線とその情景を眺める歌人のしみじみとした心と似かよっているように思う。よって、「遠浦帰帆」歌が表したのは旅の心ではないが、明石の浦の歌と同じようなしみじみとした帰ろうとする「帰心」である。

さらに、「遠浦帰帆」歌では穏やかな水面より風や白波が起こる水の方が描かれる。波と船の進行に関しては以下の歌が重要な背景となっている。

- 世の中をなににたとへんあさばらけこぎ行く舟のあとのしらなみ (古今六帖・1821)

無常歌として後世に知られているが³⁶、人の世はすぐ消えてしまう船の波の跡のようになぞらえ、水の波によって世のはかなさが伝わる。頓阿の「波のうへにいそく片帆」や正広の「まほならで世はうき物と浪の上にあや」などから見えるように、帰帆が常に浮きつ沈みつ急いでいるように描かれ、これは浮沈の世の常を暗示しているのではないかな。

以上のように和歌における「遠浦帰帆」は波に乗って遠浦から帰ってくる漁舟として定着している。波の不安定による世のはかなさへの連想及び、急いでいる船から焦る帰心が読み取れよう。これは漢詩で一日の仕事を終えた気楽で賑やかな漁師の姿と対照的に見える。

三、おわりに

以上のように本稿は中世日本における「遠浦帰帆」をめぐって、その表象の多様性を辿ってみた。

中国で士大夫の旅愁を抱える「遠浦帰帆」は、日本の漢詩では旅人の漂泊を表す客船と漁師の気楽さを表す漁舟として描かれる一方、和歌では波に乗って急いで帰る釣舟として描かれたのである。「遠浦帰帆」歌から世に浮沈する人のしみじみとした帰心を読み取れることができよう。

その帰心は一体どこへ向かっているのかについては紙幅の関係で今後の課題としてさせていただきたい。

注

- 1 衣若芬「漂流與回歸—宋代題“瀟湘”山水畫詩之抒情底蘊」、『雲影天光：瀟湘山水之畫意與詩情』、2013年、里仁書局、170頁。(初出：『中國文哲研究集刊』21期(2002年9月)、中央研究院中國文哲研究所、1-42頁)
- 2 同上、175頁。
- 3 石守謙「勝景の化身—瀟湘八景山水畫與東亞的風景觀看」、『移動的桃花源—東亞世界中的山水畫』、允晨文化、2012年、128-129頁。
- 4 朝倉尚「瀟湘八景詩—禪林における三転期」、『禪林の文学—詩会とその周辺』、1985年、清文堂、33頁。
- 5 同上、33-34頁。
- 6 堀川貴司『瀟湘八景—詩歌と絵画に見る日本化の様相』(原典講読セミナー8)、臨川書店、2002年、77頁。
- 7 堀川貴司「瀟湘八景詩の抄物」、『五山文学研究—資料と論考—』、笠間書院、2011年、78頁。
- 8 衣若芬氏は玉澗と交流のある文人から玉澗が1180-1190年頃に生まれ、1260-1270年頃に没したと推測した。(衣若芬『雲影天光：瀟湘山水之畫意與詩情』、里仁書局、2013年、312頁。)
- 9 周裕鍇「典範與傳統:惠洪與中日禪林的“瀟湘八景”書寫」、『中國古代、近代文學研究』巻7(2014年7月)、中國人民大學書報資料中心文化編輯室、73頁。
- 10 前掲注4、5-6頁。
- 11 『石門文字禪』、民國十年常州天寧寺刻本、巻8(CBETA 2020.Q1, J23, no. B135, p. 611a27-c1)
- 12 『石門文字禪』、民國十年常州天寧寺刻本、巻15(CBETA 2021.Q4, J23, no. B135, p. 647b22-c16)
- 13 諸橋轍次『大漢和辞典』第七巻、大修館書店、1986年、175頁。
- 14 同前掲注6、196頁。
- 15 「都立中央図書館加賀文庫蔵『瀟湘八景鈔』」、堀

- 川貴司『五山文学研究—資料と論考—』、笠間書院、2011年、188頁。
- 16 堀川貴司氏は伝玉澗詩が日本人の禅僧の作品である可能性を指摘している(前掲注6、81頁)。よって、本稿では日本の漢詩として扱う。
- 17 同前掲注6、199頁。
- 18 川平ひとし「叡山文庫蔵『瀟湘八景註』をめぐって」、『国文学科報』第24号(1996年3月)、跡見学園女子大学、62頁。
- 19 「叡山文庫蔵『瀟湘八景註』」、同上、66頁
- 20 「都立中央図書館加賀文庫蔵『瀟湘八景鈔』」、同前掲注15、204頁。
- 21 仏書刊行会編『念大休禅師語録外二部』(大日本仏教全書96)、名著普及会、1982年、145頁。
- 22 同前掲注6、201頁。
- 23 有吉保「中世文学に及ぼした中国文学の影響—瀟湘八景詩の場合—」、『日本文化の原点の総合的探求I 言語と文学』、1984年、164頁。
- 24 同前掲注18、53-56頁。
- 25 同前掲注6、58頁。
- 26 有吉保「中世飛鳥井流の歌壇活動の考察(一)飛鳥井雅縁(宋雅)攷 新資料「晴月集」の翻刻を兼ねて」、『研究紀要』第49巻(1995年)、日本文学部人文科学研究所、24頁。
- 27 同前掲注23、163頁。
- 28 同前掲注23、160頁。
- 29 岩佐美代子「補説 八景歌考」、『京極派和歌の研究』(改訂増補新装版)、笠間書院、2007年、309頁。(初出：「京極派の八景歌」、和漢比較文学学会編『中世文学と漢文学I』(和漢比較文学叢書5)、汲古書院、1993年)
- 30 同前掲注23、159頁。
- 31 同前掲注23、166頁。
- 32 湯浅清『心敬の研究』、風間書房、1977年、626頁。
- 33 伊藤伸江・伊藤敬『草根集・権大僧都心敬集再昌』(和歌文学大系66)、2005年、明治書院、135-136頁。
- 34 「白杵市教育委員会蔵『八景詩』」、堀川貴司『五山文学研究—資料と論考—』、笠間書院、2011年、216頁。
- 35 小島憲之・新井栄蔵校注『古今和歌集』(新日本古典文学大系5)、岩波書店、1989年、134-135頁。
- 36 佐竹昭広等校注『萬葉集一』(新日本古典文学大系1)、岩波書店、2000年、302頁。

参考文献

書籍／論文(年代順)

玉村竹二編『五山文学新集』、東京大学出版会、1967-

1991年。

湯浅清『心敬の研究』、風間書房、1977年。

仏書刊行会編『念大休禪師語録外二部』（大日本仏教全書96）、名著普及会、1982年。

有吉保「中世文学に及ぼした中国文学の影響—瀟湘八景詩の場合—」、日本大学総合科学研究所編、『日本文化の原点の総合的探求I 言語と文学』、1984年、141-176頁。

朝倉尚「『瀟湘八景詩』—禅林における三転期」、『禅林の文学—詩会とその周辺』、1985年、清文堂、3-58頁。

小島憲之・新井栄蔵校注『古今和歌集』（新日本古典文学大系 5）、岩波書店、1989年。

田中裕・赤瀬信吾校注『新古今和歌集』（新日本古典文学大系 11）、岩波書店、1992年。

鈴木廣之「瀟湘八景の受容と再生産—十五世紀を中心とした絵画の場合—」、『美術研究』358号（1993年12月）、東京文化財研究所、299-319頁。

有吉保「中世飛鳥井流の歌壇活動の考察（一）飛鳥井雅縁(宋雅)放 新資料「晴月集」の翻刻を兼ねて」、『研究紀要』第49巻（1995年）、日本大学文理学部人文科学研究所、13-35頁。

川平ひとし「叡山文庫蔵『瀟湘八景註』をめぐって」、『国文学科報』第24号（1996年3月）、跡見学園女子大学、51-70頁。

佐竹昭広等校注『萬葉集一』（新日本古典文学大系 1）、岩波書店、2000年。

堀川貴司『瀟湘八景—詩歌と絵画に見る日本化の様相』（原典講読セミナー8）、臨川書店、2002年。

周裕鍇「典範與傳統：惠洪與中日禪林的“瀟湘八景”書寫」、『中國古代、近代文學研究』巻7（2014年7月）、中國人民大學書報資料中心文化編輯室、71-81頁。

伊藤伸江・伊藤敬『草根集・権大僧都心敬集・再昌』（和歌文学大系66）、明治書院、2005年。

岩佐美代子『京極派和歌の研究』（改訂増補新装版）、笠間書院、2007年。

堀川貴司『五山文学研究—資料と論考—』、笠間書院、2011年。

石守謙「勝景の化身—瀟湘八景山水畫與東亞的風景觀看」、『移動的桃花源—東亞世界中的山水畫』、允晨文化、2012年、91-188頁。

古今和歌六帖輪読会「古今和歌六帖全注釈」、お茶の水女子大学附属図書館（E-bookサービス）、2012年。

衣若芬『雲影天光：瀟湘山水之畫意與詩情』、里仁書局、2013年。

データベース

「新編国歌大観」（DVD-ROM版）、角川書店。

「CBETA漢文大藏經」、CBETA 中華電子佛典協會。

[付記]

本稿の引用は、特に断らない限り、和歌は『新編国歌大観』（DVD-ROM版）、五山漢詩は『五山文学新集』（玉村竹二編、東京大学出版会）に拠る。なお、漢詩の漢字表記を常用漢字に統一した。